「主イエスの死」　2023年12月06日

すでに昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、三時に及んだ。太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。イエスは大声で叫ばれた。「父よ、私の霊を御手に委ねます。」こう言って息を引き取られた。百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を崇めた。見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た女たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。（ルカ23：44～49）

マルコ福音書は、主イエスが十字架につけられたのは午前九時であったと書いている。昼の十二時頃になった。十字架の苦しみは、刻々増していく。すると、全地は暗くなり、午後の三時にまで及んだ。全地が暗くなったということは、自然の現象ではなく、神の子イエスの十字架の死を嘆き、悲しむ神話的表現であろう。更に、エルサレム神殿の垂れ幕が真ん中から裂けたと記している。神殿と刑場の間には相当の距離があるが、主イエスが十字架で息を引き取ろうとした時、神殿の垂れ幕が裂けたという。神殿の契約の箱が置かれている聖所には、神と人とを隔てていた垂れ幕が下げられていて、中には入ることができない。その垂れ幕が裂けたということは、神と人とを隔てていたものがなくなり、神と人とが結び合うようになったということである。十字架によって隔ての垂れ幕を無用とされた出来事について、ヘブライ書10章19節で、「それで、きょうだいたち、私たちは、イエスの血によって聖所に入れると確信しています。イエスは、垂れ幕、つまり、ご自分の肉を通って、新しい生ける道を私たちのために開いてくださったのです」と書いている。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けたということは、主イエスの十字架の死によって新しい生ける道が開かれた、即ち、神と結び合う罪の赦しが実現したというメッセージである。

主イエスは、午後の三時、「父よ、私の霊を御手に委ねます」と言われ、息を引き取られた。どれほどの苦しみであったであろうか。しかし、最期は平安に神への信頼の祈りを捧げて、逝かれた。十字架刑は普通2～3日、苦しみ抜いて死に至るが、主イエスの場合、午前9時から午後3時まで、6時間で亡くなられた。受難週の緊張の日々、昨夜以来の暴力的仕打ちと無法な裁判で、体力は消耗し尽くし、短い時間で死に至ったと言えよう。

主イエスの十字架刑を仕切っていたローマの百人隊長は、全ての出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を崇めた。彼は、ユダヤ教のラビの間で起きた嫉妬によって、主イエスが死に定められたことを知っている。罪のない身でありながら、罪をかぶせられ死に逝く主イエスは何の反抗も言い訳もせず、黙々と死に渡されて逝かれた。彼は主イエスを「正しい人」と見抜いている。そればかりか、主イエスの死に、神を見たので、神を崇めた。異邦人の中で最初に、主イエスに神を見た人である。

見物に集まっていた群衆は皆、荘厳な死の様を見て、胸を打ちながら帰って行った。むごたらしい十字架の死はいつも見ていたが、主イエスの死はいつもの十字架刑とは違う、神のリアリティを啓示するものであったので、群衆の心に深く残った。主イエスを知っていた人たち、ガリラヤから従って来た女たちは、遠くに立って、これらの全てを、胸を剣で刺し貫かれるような思いで見つめていた。主イエスは、オリーブ山で「私の願いではなく、御心のままに行ってください」と祈られた神の御心のままの死を遂げられた。